

令和5年度事業計画の重点

1. インクルーシブ保育、園環境・保育実践の見直しと保護者対応<新規>
2. 木の花版未満児保育を編み込んだ園生活の創造<←昨年度重点2>
3. コロナアフターの園生活、子育て支援(在園、未就園)の対応と発信の見直し<←昨年度重点3>
4. 協働的かつ業務分掌的なスタッフ体制の整備、再編成<←昨年度重点4>

1. インクルーシブ保育、園環境・保育実践の見直しと保護者対応<新規>

視点	項目	実践したことでのよかった点、改善されたことなど	課題として挙ったこと	改善へのヒント・アイデアなど
保育実践(子ども理解からの保育)	エピソード収集(配慮が必要な子+気になる子)	異学年の見落としがちな子にも注目するきっかけになった。	気になる子どもたちのエピソード収集が難しい。集団の中に紛れている。注目する子が特定の子に偏ってしまう。(写真、動画など)	目立たない子研究レポート その子を集中的に見る一日を作る。
		気になる子をより意識してみようと思った。	気になる子どもたちも含めると配慮を必要とする子どもたちが多く負担が多く感じられる。	ノートは限定した子に限り、気になる子ども達についてはエピソードがあるだけでもいい
		目立たない子で気になっていた子への意識をもって子どもを見ようとするようになった。		気づいたらすぐに記録 メモをとる。 いろいろな子にエピソード話す。
		多様な子どもたちへの遊びや行動、人間関係などへの視野が広がった。	クラスの中に入らないことで具体的な姿を記録することができない。これは、と思ったエピソードを見かけたとしてもすぐ忘れてしまう。(目先の保育の状況に追われて。)	共有フォルダーにその都度、追記していくという話もあったが、いちいちパソコンを開くことが面倒になり、記録を残すことをためらうこともあるので、職員LINEの中のノート機能(メンバーに情報を共有できる掲示板のようなもの)を利用し、写真、コメントを書き込めるようにしてはどうか。スマホの方が、打ち込むことが簡単で、写真も載せやすく、自分の都合のいいタイミングで簡単にできるのではないだろうか。見るほうも自分のタイミングで見ることが出来、職員全体での共通理解のツールとしても使えるのではないかと思った。
	ビデオトーク	一人一人の関わり方にかかわるか? 考えるきっかけになった。		1人1回インリアルで深く理解する
		色々なモノの見え方、人により違ってくる、正解がない、そんな感覚がいい。		
	空間活用	以上児の一人がぐみ棟の水置き場に葉っぱを入れる遊びをするので、他のぐみたちが遊びに活用。	空間の使い方を計画的になかなかできていない。	職員会議の際に空間の使い方などを全体で確認する一週案の立案
		本園、ぐみ棟への行き来がそれぞれの安心できる環境を自ら見出して遊べる選択ができていた。		
		ぐみ棟で、いつも遊びに来るブチの子の遊びが受け入れられている。		
		年少うめ保育室を環境構成を定期的に変えてみたことで子ども達の、特に配慮を必要とする子どもたちにとっては、遊びや休憩の場所になっていた。	自由遊びの時間に他学年の子が気軽に入って、そこでこっとりと遊ぶというところまでには至らない(遠慮や気後れがある)。	
	モノの配置	街づくり、ドミノなど廊下を活用したことで見える環境を用意することで年中の気になる子どもたちが入りやすくなっていた。		
		部屋の中で工作場所を設置したことで、「会社」に見立ててそこを拠点に色々な子が遊びに入り込んでいた(活動中は「休業中」という看板をかけていた)。新しい顔ぶれが出会いの場が広がった。	空間を作るために使っているパネルが壊れているので直しながら使うのは不便	パネルをしっかりと直す
		絵本をそのままほしくない。そのために組み立てマットを絵本コーナーに置いたことで、他の子ども遊び、それが配慮を必要とする子どもたちの遊びにつながっている。	とっさに大人が発してしま言葉で周りの子に悪い子と思わせてしまうこともある。とっさのときに大人はどう表現するか?	
		マットを使った新しい遊びが生まれ、遊びの素材として 絵本コーナーの中にさらに絵本コーナーが出来ている。 職員室の絵本コーナーが配慮を必要とする子どもたちのみならず他の子にも魅力的な場所になっている	絵本が粗雑にされる場面を目にする。(配慮の子に限らず他の子らも……)	大人も遊びに入ることでそのことに没頭できるきっかけ 大人が絵本を大事にする姿勢を見せる。
	ひと…大人、たて割りなど	ぐみ棟の小さい積み木を2階からおろしておくことで配慮を必要とする子どもたちもそれをよく使って遊んでいる		
		丸太を輪切りしたもの、どんぐりを落とすモノなど配慮を必要とする子どもたち用に用意したものが他の子らにも響いている		
		ぐみ棟の家具を移動して狭い道(空間)、囲われた空間、ロータリーにしたことでぐみの子らにも遊びが広がっている		
	ひと…大人、たて割りなど	ぐみによく遊びにくる子につられてブチの他の子らも遊びに来る。人間関係の広がりや行動の広がりを生んでいる。		
		ぐみ棟の大人(サポーター)への甘え方が違う。(本園では見せない姿が垣間見える)		
	フリーの配置	幅広い関係の中でぐみ2歳の子たちに遊びが広がっていた。		
フリーの先生が他の空間にいることでどこかで誰かが見てくれる、見守る、遊びを作ってくれることで配慮を必要とする子どもたちの様子をうかがえる		クラスの一員としてメリハリがつけられていない場面も多々ある。(他の子にとっても……)	お集まりの場所を色々変えてみる いちちごっこかもしれないが子どもとともに声をかける。	
サポーターの補助	Xmas会でのサポーターの入り方で子ども達、配慮を必要とする子どもたちの動き方が変わった。			
	お散歩にも安心して出かけられた	フリー、サポーターに頼りすぎてしまいがちなケースも……	活動の前後に彼らと付き合う、彼らを含めたグループ活動に担任が入るなど、保育の中でのメリハリを保育者も柔軟に発揮できるように	
きらきら会参加	家での映像を通じて子ども理解が進んだ。(全体像が見えた)	リアルタイムで直接話を聞き、その場で話し合える場としてよかった。		
	フランクに気軽に楽し気に話し合う雰囲気やすぐよくなった。	クラスの子以外の他の学年の親の話を聞いたことが新鮮であった。		
	気になる子どもたちの親の参加が増えて雰囲気が変わってきた。	周りの親にも語ってくれる、自然と伝わるようになっていった。		
きらきら会参加	担任とだけ話すときは話を合わせてしまうことでも、親が本音が出やすい。親が気にしていることがリアルに分かる。			
	色々な子がいて、色々な悩みを持っている、という感覚が広がっていた。	気になる子の「何が気になるのか?」を親への伝え方の中身とタイミングが難しい。	保育の場でのちょっとした出来事、エピソードなどをきっかけに 面談の機会を活用する	

保護者支援、対応		相談室の存在が大きい。親と保育者と循環できている。			
	情報共有	子どもの情報を親とより話し合えるようになってきた。	連絡帳を介して子どもの思いがより伝わるようになった。		
		連絡帳がわりに写真を見せてそれでリアルタイムに伝えることで、共有しやすかった。			
		写真や動画で子どもの活動風景をリアルタイムで伝わりやすい(ラインなども活用)。			
		親への情報共有ができていたことで行事等への参加につながっている 立ち話も大事…。			
	家庭訪問	家庭の実際の様子で子ども理解がリアルに伝わる			
	親子登園	その子にとっていい、園につながっていればいい。親は安心グッズ(お守り)としていることで、子ども自身が離れて遊びにいける。		他の子らが親を取ろうとする。	
	一日先生	ベテラン保護者が参加することで安心感を担任も感じた。		(レτζョの展示会などの)一日先生の際には活動の中身を考慮する必要がある。	園外に出る様なケースではグループで分散するような対応等も考えられる
		年長さんで入ると仕事ばかり、という印象。年少さんは楽しかった、と思う保護者も。	案内を出すときに事前に大まかな保育の内容を公開することで見通しを持つことができるようにする。		
育ちのノートでの面談	保護者が担任への信頼感をもつ。	そのことで園の方針が見える	育ちのノートの記録の負担感	ノートの簡素化、画像付き。	
	同じモノでも家庭での使い方の差異を親自身が実感。家だとダメと言ってしまうことも園なら許される。一歩踏み込んだ話ができる。			休み期間の出動日の保育の中で時間を調整してゆっくり記録する。気になる子どもたちのエピソードを含め	
おしゃべりWeekでの親同士の理解	配慮が必要な子を他の保護者が知ると共に、多様な子どもたちがいることを彼らの保護者も知るきっかけになる。		時に何気ない会話の中で、苦手意識を感じたり、誤解してしまう保護者もいる。	自分(職員)も入ってみたい。スケジュール・スタッフ調整	話して人と知りを知る。合わない人は合わない。
自由記述 (他に良かったことや今後に向けて取り組んでみたいこと、課題やその改善、気づきを活かす、良さを伸ばすためのアイデアなど)	配慮を必要とする子どもたちが人の気配がない場所を選びそこでじっくり好きなことをして過ごせる時間も、ここではそれなりに保障されていると感じる。				
	自由遊びの際、どの空間に程よく(子どもに対して多すぎず、少なすぎず)大人の目があり、職員全体で子どもたちを見る環境が良いと思った。				
	フリーの先生が活動に応じてクラスに入ってくれたことがとても助かった。特に行事に向けては、一人では出来なかったことがたくさんあったので、アドバイスや自分では気づかない視点などたくさんもらうことができた。				
	各学年にフリーの先生が入らないことで、活動中の配慮を必要とする子どもたちの居場所が確保されている、という点ではとても良いと思うのだが、お集りの時など、担任が声をかけたくても掛ける余裕がない時に取り残されてしまうことがある(子どもにとってはむしろありがたいのかもしれないが)、年長になると、クラスの子もたに頼むなど、子どもたちにも同じクラスの一人という意識を持つようにはできるが、小さい学年のときには大人が意識しないと、いつも怒られることをする存在として認識させてしまったり、「いなくてもよい」と思わせてしまうことに繋がってしまうかもしれない。また、小さいときから一緒に過ごすからこそ、同じクラスの仲間としての意識にも繋がるのだと思う。担任だけでなく、フリーのスタッフも「他の子どもたちから見て」を十分意識して、関わる必要があると思う。				
	配慮したり意識しなけいばいけい気になる子についてなんとなく意識はしていたが、明確に名前を挙げたことで、その子たちの会話や人とのやりとり、ズレやこだわりなどを特に意識して気にかけてたり、メモするようになり、よりその子たちの面白さなどがわかるようになったのは良かった。				
	気になる子どもたちを全体で整理したことによって、気になるけど見落としてしまいそうな子たちを特に気にして見ようという意識が生まれた。				
	配慮を必要とする子どもたちの中で、明らかに必要とする子以外の、職員同士で“きつこの子もそうだね、”と思う子どもについては、そう思いながらも話し合いはしていなかった。だが今年、職員同士の中で明確に気になる子どもたちの確認、ねらいについて話し合いをする機会を設けたことでより意識するようになったように感じる。回覧してノートを見ることはなかなか難しいので、全体で共有する時間があるというのは、文章だけではわからない言葉の意味を実際に担任の話を書くことで伝わってきた感じがした。個人的には、ねらいを文章にするのが苦手なので、他の担任の先生たちのねらいの立て方が勉強になった。				
	気になる子のエピソードが必要なのはよく分かるが、人数が増えることで、整理に時間がかかり、結果、仕事の量が増えることには繋がるのではないかと。簡潔にまとめる方法があればいいが、エピソードをデータでもらえるのは助かる。読んで分からないことは直接書いた先生に聞くこともできるし、まとめる時も処理しやすいのではないと思う。ぐみ棟にいると以上児の子のエピソードと出会う機会がない。エピソードを書くためではないが、ぐみの子が幼稚園で遊ぶ機会を作って、その中で以上児のエピソードに出会うことを意識するといいかもれない。				
	ビデオトーク研修があることで、その場では気づくことができなかった発見、自分一人では思いつかなかった見方を職員間で共有できたのが面白く、学びにもなる。				
	園内研修や保護者と共に行うビデオトークは、意見したり聞いたりすることで子どもたちの姿を改めて見て振り返りや気づきがあったので出来てよかった。違うクラスの子も理解へも繋がったと思う。				
	その子の居心地がいい空間で過ごすのはとてもいいことだと思う。それにつられてその場に来る子もいるので…。(特にぐみ棟で遊んでいるときの以上児の様子など)担任の先生が実際に見ることができるとさらによいと思う。自由遊びの時も、以上児の先生もぐみ棟に遊びに来るといい。その子のその時の様子を伝えることはできるが、話を聞くよりも、実際にその遊んでいる様子を自分の目で見ることで感じることもあると思う(先生1人1人の感じ方は違うと思うので。ましてや、担任の目線と他の先生の見方や感じ方が違うと思うので。)朝の時間、保育室に誰かがいないといけないなら、フリーの先生や、事務補助スタッフなどに入ってもらう日があってもいいのではないかと。				
	年中の一日入園の取り組み・ぐみブチ交流によって、ぐみ棟へ足を運ぶ子が増えた。増えたことによって、子ども同士の新しい出会いもあるし、遊びの広がりもあると感じている。				
	マリimbaを頂き、年長クラスに設定したところ、小さい子たち(主に年中児)が入ってきて、鳴らし楽しむ姿が見られ、その保育室ならではのモノがある良さを感じた。また、年長児だからこそ使い方が任せられると伝えたことで、自分たちで意識して大切に使う姿(毎回布をかけて片付ける)姿が見られた。				
キラキラ会に、担任の先生が入るのはいいことだと思う。その子の家庭での様子を知ることでもできるだろうし、キラキラ会の雰囲気も感じることもできると思う。今年はキラキラ会に参加している方が多いように感じ、参加者が増えることで、同学年の親だけではなく、横の繋がりができていくように思う。また、放課後にキラキラ会を行ったのはいいいと思う。仕事があって来られない方もいるので、午後の開催もあると参加する人が選択できるのではないかとと思う。					
さらさら会に担任も混ざって、親と本音で語る場があるのは良いなと思った。(まだ参加したことないので、機会があれば参加してみたい)					
特に配慮を必要とする子どもたちと、そこに近い配慮を必要とするお子さんについては、家庭訪問があるといいと思う。働く親御さんでも最近では園での面談形式になることも多いが、家庭の様子を肌で感じることで、家庭の様子や園の姿を総合的に捉えられると思う。また、素の姿が見えやすい(親も子も)。スケジュール的に4月でなくても、面談代わりに適宜に取り入れる形でもいいように思う。					
保護者として一日先生に参加していたが、個人の感想としては、年長は大変、年少は楽しいという活動内容での感想より、毎年参加することで、日常の中での取り組みの内容や友達との関わり方の変化など、成長がよくみえたことがとても面白く、良かった。発表会や運動会でも成長は感じられるが、園のことや子どもたちが毎日の園生活の中でたくさんのことを自分で考え、選択し学んでいることを保護者が知ることができる貴重な機会だと思うので、もっと参加したいと思ってもらえるように、押しつけがましきにならないように、もう少し一日先生の良さが伝わるようにしないとダメなところも思う。					
「一対一では見せない親同士の本音の部分はグループトークの方が出やすいのかも…」とのことだったので、おしゃべりウィークは我が子のことでなくて園をどんな風に捉えているんだろう?という保護者のパーソナルな考え方も見えそうなので、参加したい!と意欲的には考えきれないが、参加して意見交換するのでもいいかもしれないと感じた。					

観点	評価 A: 自信をもって B: 概ね良好 C: 改善の余地有 D: 課題である E: 全然出来ていない	園長	教職員				
インクルーシブ保育、園環境・保育実践の見直しと保護者支援・対応への努力	園は、一人一人の特性のある子どもの姿を受け止め、安心・安定できる環境の用意とその子らしい学びの場が得られるように配慮し、多様な子ども同士が響き合う園生活作りに努めると共に、子どもの育ち、学びの力を保護者と共有し、多様性のある園生活への理解と参画に努めている	A	B	C	D	E	無
		C	1	10	3		

2. 木の花版未満児保育を編み込んだ園生活の創造(←昨年度重点2)

視点	項目	実践したことでのよかった点、改善されたことなど	課題として挙げたこと	改善へのヒント・アイデアなど
1. 2歳のぐみの姿	育ちの力	特に1歳の子が本園で遊ぶ姿が馴染んでいる	言葉にならない遊びを楽しむ	1歳の安全確保(本園での特に自由遊びときなど以上児に扮れているケース)
		自分の欲望、想いに忠実に動いている。	自分の感情に思うがまま	
		自由奔放に自分の思いに忠実。	人懐っこい。	
		空気を讀まない。自分の思いを行動でしっかり表現できている。		
		大人要らず、という印象。大人ではなく自分の世界に没頭	自分で出来ることも大人に目線でアピール。	見て見ぬふりが必要な時もあるのかも
		小さくても子どもによっては相手やその時の気分により感情や欲求の出し方を変えている	大人を巧みに動かすこと(呼ぶこと)に長けている。	ぐみとプチのクラスチェンジ、ぐみの子にも感じてもらう。自分は自分で!の世界。
		何も無いところでも遊びを見出す。トランポリンなどを利用して遊び道具にしたり、トイレスリッパを並べたり・・・		
		押すのが好き。(手押し車、牛乳パック、椅子、机など道具のみならず生活の道具も遊びに替えている。)		
		単純な遊びが好き(グルグル回ったり・・・)		
		日々の中で子どもの姿の変化、成長が見える。(身辺自立、行動、表現など)	生活能力がついている(排泄・着替えなど)	手助けをしていい、線引きはどうか?
人としての能力(共同注視、伝えようとする力、コミュニケーション)がスゴイ			本園への色んな入り方(2階から・一度外に出て玄関から入るなど)	
発見する力。園の中でいろいろな細かいモノを見出す。				
安心して暮れられる。(自分の感情をため込まず発露できている)				
年中の発表会に向けた取り組みにも園庭でぐみの子らが混ざっていた(火を使う活動にも物おせず)。				
上の学年からの刺激	上の学年に遠慮しない(以上児のクラス活動にも普通に混ざってきている)。		本園に出来ない子の壁。(以上児の子の声や行動など)佈き、安心感をどう作るか?	気になる子どもたち、という視点で柔軟な配慮も必要かも・・・。本園への色んな入り方(2階から・一度外に出て玄関から入るなど)
	上の学年の遊びを見ていて、それを取りこもうとしている。	ツリーハウスに登ろうと真似したりなんでもやってみる	ぐみ棟や特定の子への執着。この子がいかないからいいかない。	ぐみを均等にグループに人数割振りをしなくてもいい
	幼稚園を我が物顔で本園のあちこちに出没している。	冒険的になんでも挑戦。	上の学年の子に、もう少し小さい子がいるという意識、気を遣うなど、育ってほしい	ぐみ2歳含めてのたて割りで大きい子が小さい子を意識するきっかけを作る
1. 2歳の関り	人を見てよく真似る。	ぐみの子の真似もしている。		
	1歳と2歳との関わりが面白い。遊びの中でも1歳と2歳の中でいろいろな関わりが見える	相手をいろいろ選べる		
援助や環境構成	ぐみ棟での生活、遊びの援助、環境構成の実践など	デッキに溜まった(落ちてくる)アラレや雪を使って遊ぶなど自然を取り込める環境の保障	ぐみぐみ暮らしの生活が他のスタッフには伝わりにくい。	職員バージョンの一日先生。緩やかな時間が取れる時に年長担任と1グループでぐみ棟体験
		ベランダで雨だれを遊びにしたり、雨の日にベランダで絵本の読み聞かせなど	ぐみぐみ暮らしの生活を知らない。	ぐみの経験のないスタッフで1週間ぐみ棟で生活
		家具の利用。動かして環境構成の変化。回遊したり、囲われた空間にしたり		長期休み期間中の以上児スタッフのぐみ棟体験
		行事に合わせてぐみ棟でも似たような環境作り(お店屋さん、巧技台など)	3階スペースのモノの置き場の活用	秘密基地づくり(テントなどを使って)などはどうか?
異年齢交流	異年齢交流(非日常含む)の課題改善	ぐみ棟の囲われた環境が見えやすい、じつり取り組みやすい環境と改めて実感。	ぐみ棟の便器、2階につき1つしかなく、子どもたちに使わせにくい	
		生活の場として着替えは1階とし、遊びとして2階を活用して、1階で食事をして2階へ寝に行く・・・という生活パターンが根付いている。	ぐみ棟の使い方に活動が左右されることも	ぐみ棟の使い方を固定的にせず、柔軟にやりたいことができるように、活動によって使い方を変える。
		運動会でのちっちゃい子の競技の取り組みの中でぐみ棟に通ってぐみの子と関わったりすることで、ぐみ棟の中で年長が意欲的に楽しみに動いていた。ぐみの先生にも運動会を知るきっかけにもなりいろいろな道具を使って見せることでそうした道具への興味関心も深まった。		
		以上児やフリーの先生たちにもぐみの子が良く見えてきた。	ぐみ棟との距離感	
		ぐみプチの関係が対等に感じられる。空間の持ち回りの使用。人数も同数で互いに自由遊びで付き合うようになっていた。	ぐみプチのスタッフの連携の時間の取り方	代表での打ち合わせ(全員揃ってするのは月に一度)
		回を重ねることで互いのことを知り、意識して遊べるようになる。新しい関わりがみえてきた。		
		続けてきて赤の他人感覚が薄れて、互いの好きなことが見えて関わり方が増してきた。		
		ぐみプチ共にぐみ棟を抜け出してクリスマスツリーに遊びにきていた。		
		プチがぐみ棟への登園も慣れてきた。活動の日にも「行ってきます」と自分から自ら行き来できる。		
		ぐみの人間関係の広がりが見える。プチとの交流を踏まえて、より多様な(以上児)人間関係の広がりのおかげにも。		
ぐみプチ年少のたて割りで活動を通じて年少さんも人間関係が変わってきた。				
選択できる緩やかなグループでの空間で活動することに抵抗感がなくなってきた。(他のグループでもいい、という緩やかさ)				
プチとぐみの遊び方に少し違いが窺える。ぐみのごっこ遊びとプチとは違いが見える。よりリアル、具体的。人形遊びもリアルにごっこ遊びを展開。				
プチのほうがより大がかりなものを作る。作り方が3次元的。高さを付けて遊びを創り出している。				
お散歩の仕方が変わってきた。手を繋いで歩くのが楽しい。				
集団遊びの楽しさを知ってきた。勝手に手を繋いで回っていたり、わらべ歌でみんなが集まって来たり・・・集団ですることの楽しさへの興味関心が増えてきた。				
夏の遠足(散歩)ぐみ、プチの交流で消防署へ行ったことで、ぐみの子のことをよく知るキッカケにもなり、年齢相当の遠足を双方が楽しめた。				
ぐみ研修	ぐみのビデオトーク研修でスタッフ全体と一緒に考えるきっかけになった。			

自由記述 (他によかったことや今後に向けて取り組んでみたいこと、課題やその改善、気持ちを活かす、良さを伸ばすためのアイデアなど)	いい意味でぐみの先生が子どもたちの気持ちに任せているところがとてもよかったように感じる。今年のぐみの子は特に粹に捉われないうちが多いので、より子ども主体に動くことができたように感じる。その反面、以上児の行事の取り組みが始まると本園に来るのを控えるなど遠慮がちな面も伺えた。もちろん行事などで場所が限られることもあるが、行事の取り組み中ももっと積極的に本園に遊びに来れば良いと感じる(怖がっている子は無理をさせる必要はないが…)ので、会議や終礼などでぐみの子が来てもいいタイミングなどを確認し合うことも必要かもしれない。
	ぐみの2歳児が、昨年以上に園に出入りしていることが満3歳児との境の無い育ちの環境になっているように見え、何よりも喜ばしい。ぐみ棟では物足りなさを感じている子ども本園で以上児混ざって遊ぶことでいろんな力(使い方、遊び方、人との関わり方、我慢しなきゃいけない時もあること、気持ちの切り替えなど)を養っているように見える。今年は本園とぐみ棟の垣根が本当に無いような感じがした。
	ぐみの子たちが本園に来ることで、早番や遅番でしか関わることが少ない本園の先生たちも、その子たちを知る、関わる機会にもなっているし、ぐみ棟の先生ともその子たちを通じての会話が増えたり、ぐみ棟の先生がその子たちの話をしても顔や様子浮かぶというメリットも自分の中であった。
	ぐみ棟の子どもたちとは、基本的に遅番でしか関わる機会がなかったため、ぐみ棟の暮らしを知るために(先生も以上児も)計画的に関わるのはいいなと思った。以上児の先生がぐみ棟での1日先生も出来たらいいと思う。
	本園の先生も朝の自由遊びの時間、ローテーションでぐみ棟に遊びに来る！というのがあっていいと思った。
	ぐみ棟と本園が別棟の中で、園庭での交流が始まり、少しずつ本園に行く機会が増え、園の雰囲気や年上児と触れられることはとても木の花らしい保育だと思う。子どもによっては(きょうだいがいることもあって)年度の初めから本園に行っていた。ぐみの子たちが、普段生活している場での異年齢交流ももう少し早い段階であっても、安心する場所にいるうえで違う人との交流もできて良いかもしれない。
	未満児がバザーでお店屋さんをしたり、クッキングをしたりと、無理はさせずともぐみに出来るのかなと思うことにトライしており感心した。
	プチとぐみ2歳の体験の差は感じる。その分、安心安定はぐみの方が得られるであろうが、ぐみと年少クラスがもう少し早いうちから交流し、各担任が行き来し密な関わりを持つことで、本園の大人にも場所にも安心感を感じ、もう少し早い時期から、自分たちで選択しながらいろんな体験の保障ができるといいなと思う。
	プチぐみ交流は担任同士の話し合いの時間の確保が難しい課題があるが、プチぐみそれぞれにちゃんと良い刺激になっているので話し合いを重ねながら交流をしっかりとって良かったと感じている。プチだけでぐみ棟に行けるようになり、子どもだけでいく子もおり子ども達にの"自信"が付いてきたように感じる。ぐみの子たちは、"本園は遊びに来る所"という場所から、"生活する場所"に意識が変わってきたように感じる。本園に来て不安を感じていた子もいたが、今はほとんどの子が自由に遊んでいる。それぞれ慣れていくスピードは違う意味がある交流であった。
	ぐみぐみ交流の打ち合わせについては、スケジュールや場所の段取りなどについては双方の代表のみですり合わせるので十分だと思う。ただ、「打ち合わせ」で各担任が見た子どもの姿や情報交換なども多くあり、それを基に段取りを考えていたので、全員ですることにも十分意味があると思う。保育中にその時間を設定することでほかの職員に知らせがいてしまうので、なにかよい代替案はないものかと思う。

観点	評価 A:自信をもって B:概ね良好 C:改善の余地有 D:課題である E:全然出来ていない	園長	教職員				
	木の花版3歳未満児保育の多様な展開、交流、発信への努力	園は、3歳未満児が安心・安定した園生活を過ごせるよう配慮しながら、一人一人の育ちの力が伸びゆく環境づくりを工夫し、多様な交流機会の場を設け、以上児にも響くような未満児保育の取り組みに努めている	A	B	C	D	E
B			1	12	1		

3. コロナアフターの園生活、子育て支援(在園、未就園)の対応と発信の見直し(←昨年度重点3)

視点	項目	実践したことでのよかった点、改善されたことなど	課題として挙ったこと	改善へのヒント・アイデアなど
行事の見直し	創立記念日…保護者なし・園内のみ	親子みんなで楽しめて学年の枠を超えてつながりも生まれ親として参加しても楽しめた。	参加者を小学生きょうだいを抜いた点での出づらい家庭があったこと(参加人数が読めない)	空間の活用をもっと検討(ぐみの子らの居場所も含めて)
	ランチの日	プチも自分たちで自主的に準備して昼食をとりいく姿が見られた。	座る時に仲良しで固まる。	くじ引きにして座る場所をあらかじめ学年ごとにそれぞれの子が決めてその場所に座る。
		自分で食べるタイミングを決めている。遊びを優先したり、食べる方を先じたり…。子どもの主体的な判断が活か	雨の日は遊び方、遊び場の確保が難しい。	レストラン方式で配膳サポーターに座る場所を誘導してもらう。
		ランチの日のたまたま同じテーブルに座った子同士のことをよく知るキッカケ。食べる姿、食べようとする姿などを通じてその子の人となりを知る。	時間の捻出	年間予定の中にあらかじめ組み込んで予定しておく。
	お別れ散歩	天気の日はいい。好きにいろいろな場所に行けたり、他の子グループで遊べることもある。	雨の場合、グループによっては出ずるのに苦労するときもある。 時間がタイトに感じる時もある。	雨の中でも歩ける体験を継続しつつ、悪天の時は止めるなど柔軟に対応する。
	お泊り保育	祭りをテーマに地域の方も招いてみて、子ども達も大人も楽しめた。積み重ねが大事。積み重ねを通じて小西さんもより園に興味を持ってくれた。		
	夕涼み会	一発開催で賑わっている雰囲気子ども達も味わうことができた。		
		土曜日開催ということで、係の親御さん、仕事をもつ方も出やすかったのではないだろうか。		
	祖母の会	敬老会でいろいろな祖父母と楽しんだり、祖父母も色々な子と関わるような姿勢がすごかった。	大人数を見越して活動場所を考慮する必要がある。	一日の中で時間制で学年別に分けて行ってみる。
	祖母の会	地域の人を招いて参加してくれたことで、子ども達も楽しんでた。	敬老会をきっかけに顔なじみになってきた。	
非常に参加者が多くてびっくり。いろいろな人と関われるし、祖父母が来ていない子も選択肢があった。				
幼稚園の事を知ってもらいきっかけになった。家で孫との会話が弾んだとか。				
他の学年の子の店を見に来れる機会としての平日、異学年のお店開店はよかった			創作の店、食事系の店の2部制のお店を食事系を先にしたため、創作系の準備が大変だった。(また火曜日も食事系は事前準備がしづらい)	曜日の設定として大勢を迎える食事の店は火曜日

日常生活	木の花祭り	年少が予定していた時間を超えて長い時間、奮闘していた(商品売りつくそうとしていた。)		創作系と食事系の順番は、逆のほうが準備をしやすい。
		ぐみ、うちの子らも負けずにお店屋さんの売り子として主体的に取り組んでいた。	他の学年の子らの待っている空間をどうすればいいか?	
		ショー形式、いろいろなサークルのお店が出てよかった。	バザー係さんの負担について。	売り切れごめんの店をもっと活用してバザー係さんの負担軽減 園関係者で外注にしてはどうか?
	卒園生(小学生)などがサークルのお店を手伝ってくれた。	何年たっても昔の卒園生が来てくれる。		大人版の作りものはやる。作ることを強制はしない。
	クリスマス会…出演保護者限定参加	見られる機会として、出演者という限定された親だけの参加がちょうどいい感じの空間。		
	発表会(異学年親の見学解禁)	他の学年の親が肯定的に見てくれることで、意味がある。	行事ごとに振り返りをしているが、同じ話を繰り返しやっているようにも感じる。	学校評価の際の振り返りでは個別の行事の振り返りではなく、全体の方向性、まとめの語に限定する。
	たて割り	普段出会わない子らで遊びを通じて人間関係の広がり生まれ、自由遊びで勝手に遊んだり…	時間の捻出	年間予定の中にあらかじめ組み込んで予定しておく。
父レク 親子レク	1回目を親子レクにしておやじも参加しやすい環境を作ったうえで父レクは昔のような父レクに近い雰囲気できた。(年少の父の一人が他の色々なおやじに声をかけてくれた。)	縦割りの必要性が先生によって温度差がある。そのため、設定しても「時間が長い」「この時期にいれるのはきつい」など消極的な意見が出がちに感じる。負担感の方が大きいのでは?	まず次年度も継続するの検討し、続行するなら予め年間予定に組み込む。さらに当該学年も決めておく(年中と年長だけ、とか全学年で、とか)。	
保護者参画	保護者会企画	土曜日の保護者会企画、保護者会の集まりなどの活用には土曜日保育の多様な関わりの中ではよかった。		
	サークル活動	親主導で活動が展開。子どもの活動とも運動し、配慮を必要とする子どもたちへの関わり方もうまい。 親と先生ではなく、人と人との対等な関わりが楽しめていた。 特殊な技など持っている保護者発見につながった。		
	小学生サークル	親発信で始めた小学生サークルの取り組みがすごい。 卒園生の兄の預かりの存在。刺激を与えてくれる。	預りの子らとの絡みが薄かった。	卒園生の遊びがお残り時間の遊びの刺激にもなることから、「OurShip」のメンバーとのコラボも時々、あっても良いのでは。
子育て支援・発信	ワイワイ会・わいわい倶楽部	わいわい倶楽部のラフなスタイルで馴染めた子、入園に至った子もいる。		HPIに園だより、クラスだよりを検索できるようにする。
	インスタ、HB	在園の親がより深く理解してくれたり、外部の人が知るきっかけになった。		ユーチューブ非公開、公開。(連絡帳とドキュメンテーションの代替として。父レクの報告としてどうか?)
	オクレンジャー	アンケートを紙媒体ではなくオクレンジャーにしたところ回答者が多かった。また結構色々なことを書いてもらえる	匿名が難しい。 オクレンジャーの配信が多くなり、大事なモノが伝わらないことがある。埋もれていく。	スマホ操作に慣れた親世代なので、Googleフォームなどの活用もできるのでは。 オクレンジャーに重要だけでなく、絵文字を付けるなど既読率が上がる
	赤ちゃんサークル	プチプチに来て赤ちゃんサークルに入って実際に入園希望になった親も…。		

ランチの日で配膳サポートをしてくれた保護者の方も、給食作り体験では見ることが出来ない子どもたちの食べている様子が見れて嬉しいという意見があった。

ランチの日は新しい試みだが、子どもたちが自分でタイミングや席を見つけることに馴染んできた。一方でスタッフ体制はまだ時間分担が上手くないように思うので、その整理をして共有する機会が必要だと思う。

ランチの日、その子その子の食べたい時間に食べられるということが定着するとい。その日は朝から「遊ぶ日」「お仕事の無い日」くらいにして、先生も子どもと遊ぶ!! お散歩にも行きたい子が異年齢で担任の先生じゃない先生と行く、というのはいかがでしょうか。難しいかもしれないけど先生も行事のことなど忘れるくらい気持ちで。毎回のランチの日が無理ならば月に一回そんな日があってもいいのでは。年度の前半はしやすい方子どもたちがまだ慣れてないから難しいのかもとも思うが、慣れてない子と遊ぶときにいろんな子を巻き込んで遊んだり、その日はぐみも安全に考慮しながら本園の遊びに混ぜると言うのも良いかもしれない。

祖父母の会に地域の方に声掛けし、来ていただけたのは良かった。夕涼み会、バザー、お餅つきなども、積極的に子どもたち発信で声掛けし、日頃お世話になっている地域の方々に来ていただけることいいなと思う。子どもたちにとっても家族間や園内だけの関わりにとどまらな中、地域の方に見守られ、近い存在として感じる体験は、人間関係を築いていける上でも大切だと感じる。

木の花まつり、1歳ぐみは当日の朝に、「突撃探検」が出来てよかった。ちょっとやらせてもらったり、品物を見ることが出来たので。年少さんのお店の品物を買って食べたのもよかった。大人バージョンは規模もちょうどよく、「売りきれごめん」を増やすものあり。夕涼み会くらいの規模で、やりたい人がお店を出す! でいいと思う。

久しぶりの木の花祭り、コロナ禍でお店ウィークとなっていたり、お店の賑わいなどを考慮して二学年同時開催になったが、結局その日に照準を当ててぐと突き詰めていく日が二日間あることのしんどさはめぐってないと感じた。(思い切って一日開催でもいいのでは?) もしかすると学年を超えた空間の使い方(昔やってきたみたいに食べ物屋さんや舞台に集まるなど)を考えたクラスのコンセプトに捉われないお店の在り方を考えてもいいのかもしれない。

年少を親子レクにしたのはかなりハードルが下がったような気がする。実際父たちの参加率も高く、それを受けての二回目父レクもとても盛り上がった。まずは園に足を運ぶきっかけを作ることやって楽しい! を実感できるのかなと感じた。その反面、昔より飲みニケーションは時代遅れとして衰退し、父同士のつながり・父だけの集まり自体は以前同様いままな気がした。父同士の繋がりを作る別の仕掛けがいるように思う。

コロナ禍を経て大幅な行事の縮小や中止、廃止を行う園が多い中で、バザーでも保護者・卒園児などたくさんの方との交流を持つことができる形で開催できたり、園庭でいつも当たり前のように誰かからの大人がいる環境、夏休みの小学生など、色々な刺激となる環境がある事がステキだと思う。アフターコロナであっても、地域・保護者・卒園生、色々な周りの人々を巻き込んでいく木の花の保育の魅力は変わらずそこに存在していた。

縦割り活動を継続的なものにしたことで、回数を重ねるごとに、異年齢で気の合う友だちとの関わりが深まったり、グループの仲間意識も高まっていったと思う。活動を楽しみにしている子もいて、自由遊びのときに「また、〇〇グループ(縦割りグループ名)で遊びたい! 」と言いに来た子もいた。

子ども園に寄り添っている保護者も増え、職員としては土曜日の行事開催は大変と感じる事もあるが、保護者の気持ちや考えを考えると仕事を休むことなく参加できるので良かったと思われる。また、バザー係りの負担の軽減として作り物を減らす話が出ていたが、他の係りも負担の軽減策を考えていかなければならないと感じた。写真係りは、平日の行事に分担ではあるが写真を撮影しに来なければならす通年来る回数が前年度までは多かったが、今年度から写真の注文に加え支払もネット上で済むようになったのでお金や写真の枚数の確認作業が無くなった。その分保護者の負担が軽減されたように感じる。保護者だけで、係りの内容の変更が難しい場合は職員が入らないといけないかもしれないが必要な事だと感じた。

土曜保育はもうほぼ毎週あるのだから、企画やイベントも土曜日をもっと活用することで、土曜保育のマンネリ化を防ぐこともでき、働く保護者が参加しやすくなるのではないかと。

サークル活動が定着してきたのはいいことだと思う。そのサークルの活動発表は子ども達も楽しみに(夕涼み、クリスマス会、お誕生会)よかった。好きな方、やりたい方が集まっての会(サークル)なので一致団結! って感じがよい。

園生活の発信の1つとして、今年、未満児の担任が作っていたドキュメンテーションをぐみの生活を紹介するツールの一つとして、Facebookやインスタグラムで発信していけばよかった。

若い世代の先生たちは、スマホやパソコンなどを使いこなし、情報発信に努めてくれているが、上の世代の先生たちには、得手不得手があり難しい。できることをできる人ができるやり方で発信していければ、と思っている(それぞれの人が「できないことをやらねば! 」と無理したり、逆にできる人に頼り切ってその人の負担にならないように)。

知り合いに「スマホの文字(この会話では記事の語を省いた)を見るのきついなだねー内容が頭に入らない感じが」と言う人がいた。その人は紙媒体の本(物や新聞等)は大丈夫らしい。現在ぐみではクラスだよりやドキュメンテーション等はオクレンジャーで配信しているが、そのような人が保護者の中にもいるかも考えると全部オクレンジャー配信にまわるといいのかなと疑問に思うことがある。稀にみるケースだと思いが、紙媒体と配信とのバランスが必要かもしれない。

父レクや親子レク、ビデオトークなどの報告のお手紙の発信・配布が近年かなり遅くなってきていることに課題を感じる。終わって一か月もしてからお手紙がでるのは参加者以上に参加していない人にとっては関心が魅かれないように思う。週明けの月曜日に発信・配布とまではいかなくてもせめて終わって1週間以内に発信・配布を心掛けるようにしたい。そこでイベントが終わった次の月曜日をアンケートの締め切り日に設定し、次の日の午後を担当の先生にはお手紙を作る時間を設定し仕上げてしまう、というのはいかがでしょうか。(保護者にもタイムリーな内にアンケートを書いた方がいいと思うので。

観点 日常生活と行事、保護者参画等の在り方への見直しと分かりやすい発信、共有への努力	評価 A: 自償をもって B: 概ね良好 C: 改善の余地有 D: 課題である E: 全然出来ない					園長 B	教職員					
	A	B	C	D	E		無					
	1	11	2									

園は、コロナアフターに対応した子ども園としての日常生活、教育・保育活動、園行事、及び多様な保護者参画の在り方を模索し、試行、改善に努め、また保護者に分かりやすく発信しようと努めている

④ 協働的かつ業務分掌的なスタッフ体制の整備、再編成(←昨年度重点4)

視点	項目	実践したことでのよかった点、改善されたことなど	課題として挙がったこと	改善へのヒント・アイデアなど	
①共有と連携、課題改善	主担任会議	議題を限定して踏み込んだ話し合い。その結果を会議で報告。	全体会議で切り離された分、大事なところを若手に伝えきれていないところも。	時間に余裕のある若手スタッフは参加OKしてもいい。	
	職員ラインの画像添付	いない時には助かる。			
	育ちのノートの報告共有	全体での報告を聴くことでリアルに理解できる。			
	FB インスタ	外にもわかりやすく発信できている。	保育関係者からも「見えます、面白いですね」、と好評価	インスタを知らない人の存在と見れない人もいるかも・・・。	インスタアンケートを取ってみる
		食育の報告書にも活用。監査でもわかりやすい、と評価。		クラスの活動の様子までアップできていない	インスタをクラスだより代わりに。フリーの先生に活動をちょっと撮ってもらいそれを載せる。
		実際にやってみたことを保育後に振り替えることができる。		まとめてみることしかできていない。	インスタのストーリーの活用
	情報・お便りの掲示など	異学年の保護者や未就園の外部の方にも保育活動を伝えるきっかけに。		ぐみ様へのお迎えの保護者には目に留まらない。	玄関に掲示して興味のある人は立ち止まって見るかも・・・。ぐみ様にもクラスだよりなどの掲示板が必要・・・。
	サポーター	サポーターとの研修で互いに思いを共有できる。	グループで話し合えるので、互いの人となりもわかる。	父レク、ビデオトークなどの報告が当該学年だけなので、異学年、スタッフが分かりにくい。	玄関にファイリングしてあるが、その存在をもっと周知する。
	欠席連絡など	事務の先生、サポーターさんに助けられた。		確認の連絡してみると先生に伝えてある・・・という答えも。どこまでスタッフに確認すればいいか？	お休みなど聞いた際にすぐにメモ。(付箋をぐみ様においておく)
	モノの配置	備品台帳の整理、作成に役立つ。(訊かれた際にモノの場所を伝えられやすい。)		場所を変えた時にそれを共有しないと困る時がある	モノの配置の更新 写真など。
回収ボックスの備蓄	あまり過ぎて読み切れない点を解消。				

②働き方改革の課題改善	項目	実践したことでのよかった点、改善されたことなど	課題として挙がったこと	改善へのヒント・アイデアなど	
②働き方改革の課題改善	終礼・職員ポートの活用	リアルタイムの情報の共有につながる。	長時間化、会議化 終礼や会議に出られない時(当番などで)に大事なことを見落としがちになる。	終礼と会議の区別化 終礼では質問はなしにする。 終礼では子どものことだけ・次の日のことだけ話す 全部写真に写して送信する。	
	事務の先生の充実	事務負担の軽減、日常的な保育に専念できる			
		朝の当番の負担軽減、出欠の確認など。			
		日直の負担が減った。	長期休業期間の日直の時に事務作業をしていたので、その時間が無くなった分、仕事の日 は保育の日なので事務をする時間の確保が難しい	事務日を勤務日として入れる。 長期休業は基本的に出動日とする。	
	コロナ等特別休暇	気兼ねなく休みに療養に専念できる。			
	お便りのオンライン化	お便りを配る負担が減った。	誰に入れたかもわからないこともある。		オクレンジャーに要返信の注意書きを入れる。
		親もそのまま手紙を見ていないケースもあったので、そうした点では確実に送付できる手立てになっている。		便利な分、多く配信されすぎてスルーされてしまうことも・・・。	お便りが埋もれてしまうという話から、HP上に各クラス事の掲示板的なモノを作って、振り返り見れるようにしてはどうか。内容によっては、外部にもオープンにし、各学年の取り組みなども見られるようにしてはどうか。
	運番	元スタッフの預かりサポーターに助けられている。	運番の時間の不安感(人出が少なくなる時の緊急時の対応など)	元スタッフの出動日以外の曜日にもその時間帯にサポーターのフォロー。	
	ノーコンタクト		時間のやりくりがなかなか取れない。 場所の確保が難しい。ぐみのノーコンタクトはいつ？	ノーコンタクトのリモートワークはどうか？	
	土曜日保育	保育人数や預かりの時間が短時間の場合には担当スタッフ間で調整しての出退勤。(出動日としては1日でカウント)	体力がないのでしんどい時がある。		土曜日保育の日のサポーターのアシスト 土曜日保育に元職員に声をかけてみては？
イベントとのコラボで出動日を重ねることで年間の出動日の軽減に。				園開放やサークルと重なったりすると、子ども自身も楽しそうなので、可能な限りでコラボしては。	
サポーター	あ・うんの呼吸で手助けしてくれる存在。	スタッフ間のぐみ研修の後など確認事項を伝え忘れる。	運番のときに遅い時間に入ってくれるサポーターの存在	早2番のように遅2番をつくる。	
リモートワーク	先ず年長担任で試験運用	試験運用のタイミングがいつか？		春休みの長期休業の出動日として	

③人材育成と保育の継承	項目	実践したことでのよかった点、改善されたことなど	課題として挙がったこと	改善へのヒント・アイデアなど
③人材育成と保育の継承	副担任会議	若手職員同士でより深く知るきっかけになった。	時間がなかなか取れない。	
	きらきら会	担任がゲストティーチャーとして入ることで、キラキラ会を知ってもらい雰囲気を感じてもらえた。		
	職員交流の実践	冗談を言い合える機会、スタッフの人となり分かるきっかけ。 アシスタントスタッフのことを深く知るキッカケ。		

自由記述 (他によかったことや今後に向けて取り組んでみたいこと、課題やその改善、気持ちを活かす、良さを伸ばすための取り組み)	スタッフの配置ボードや会議の議題のボードができたことで、日々の先のことですぐにわかって良かった。
	フリーの先生が中心に発信しているインスタの内容が、ぱっと見て、やっている活動や子どもの姿がとても分かりやすいと思った。クラスの活動も発信してもらい、私自身も客観的に理解することが出来た。
	終礼で職員が集まる時間があるのが改めて良いと思った。(前の園で終礼をなくした際、いろんな共有がしにくい、勝手に色々決まってそれで不満に思ったり、小さな共有がされないことで行き違いが起きたりして雰囲気が良くなっていっていった。)
	ノーコンタクトの時間がとても助かった。時間を調整して作ってもらい、とても大変だと思うが、良い制度だと思った。
	運番の時間に以前のスタッフが入ってくれるようになった事で安心感を得られるようになった。その時間に事務作業ができるのも嬉しい。そのスタッフがいない日もサポーターに最終時間までいてもらえる地震などの際にも安心できる。今回の地震を経験して、いつ何時急に何かが起こる事があるかも、と感じたので、2人体制で退勤できる体制作りを継続できたら、と思う。
	預かり保育専任のアシスタントスタッフの存在。預かり担当として入ってくれているのはとてもありがたい。預かり担当の先生が1人入るのはきっと先生の負担の軽減に繋がると思う。そのスタッフがいて、そのスタッフとの遊びも見られ、預かり時間の遊びの幅ができたと思う。その一方で、ぐみの先生の保育時間の長さが課題だと思ふ。16時半までみんなが保育につかなくて(年度の初めは子どもも大人も慣れていないので、人手がいると思うが・・・)いいのではないかなと思う。今年度は16時半まで3人いる。日によっては人数次第では2人で大丈夫な日もある。その日の子どもの人数によって、記録(日誌)を書く時間を作ったりしているが、ローテーションでそういう時間を作ってもいいのではないかなと思う。(3学期くらいになると、10人くらいを2人で見ることが可能な日もある。)
	上の先生たちが職場環境を良くしようと尽力してくれているおかげで個々の職員の負担が増えた分のリカバリー(サポーターの手配やノーコンタクト、当番の割り振りなど)が多くなったと感じる。担任負担が減る一方、フリーの先生や役職の先生たちが請け負う仕事が増えていると感じている。やることが山ほどあるのが当たり前という環境は良くないが、若手の先生たちに『大変でもこれは必要!』と実感してもらえるようなアプローチがいるんだろうと感じる。しかし、具体的にはどうしていいのかわからないが、職員全体として考えるべき点もあるのではなかろうか。
	スタッフの労働環境をよくするために、毎年挙がる課題について、園は真摯に対応してれていると思う。そのことを、スタッフは知っているべきだと思う。だから、不満を言ったりはいいけない、ではなく、みんながよりよく働きたい木の花幼稚園になるために、新たに出てくる課題について、スタッフもどのように改善していけばいいのかわかると一緒に考えていくことが大切だと思う。
	副担任会議があったことで、今年度入ったばかりだが、他の職員との距離を縮めることができたように思う。色んなスタッフの助けで、事務仕事をほとんどしていないような気がするので、仕事を覚えながら積極的に書類・記録等の事務仕事もしていきたい。

※ノリイ アイン(はる)	<p>コロナの規制も緩和され、職員間の交流の場が増え、新しいスタッフのことも知れたり、みんなの意外な一面が知れたりした。サポーターも含めた親睦会も仕事だけの関係ではなく、たわいもないことを話すことにより、仕事の時もやってほしいことを頼みやすくなり、少し大変なことも一緒に頑張りとういう気持ちになり、協力してくれたり助けられたりしてきていると思う。</p>
	<p>職員が増える事は嬉しいのだが、ゆっくり話す機会を設けるのが年々難しくなっているように感じる。コロナが明け、忘年会等で保育から離れて職員同士で話せる機会は今後もあると嬉しい。また、サポーターともゆっくり話す時間が欲しいと思う。時間が短いということもあり、ゆっくりは話せないので交流も含めてゆっくり話したい</p>
	<p>懇親会があることによって、保育以外の会話で盛り上がり、その人となりをわかることに繋がっていて、就職したての時よりも格段に距離が縮まった気がする。凄く嬉しい。</p>
	<p>アシスタントさんに支えられながら保育ができていると感じ、働き方改善の面からも必要な人材だと思う。しかし長く経験しているアシスタントさんであっても、それほど関係性が深いとは言えず、互いに遠慮がちだと感じる。アシスタントさん参加の研修はよかったと思うので、回数を増やし、対等に考え合うような機会や、その後に親睦を図れる懇親会やレクリエーションなどができると、仲間意識にも繋がるとはではないか。</p>
	<p>スタッフ間のコミュニケーションもなかなかとれない状況の中、世代間ギャップも大きいので、もう少しリラックスした中で話せるような時間と空間があればと思う。終礼時に顔を合わせる際に職員室のイスが足りなかつたりもするので、配慮が必要な子にも活用できる小ぶりなソファかクッション系カウチチェアがあるといいなと思う。職員員合計でこ自由はどうぞ的なミニミニおやつなどもあって、ちょっとほっこりできそう。</p>
	<p>もう少し学年の担任間で直接、ささいなことでも伝え合えたらいいなと思う時がある(フリーを通してではなく)。活動の場所の使い方や、ちょっとした子どもの姿など、日常的に小さなコミュニケーションをとるとい意味では終礼後の時間はそのきっかけになり易いのかと思う。</p>
	<p>職員交流は昔よりも職員の人数が増えたことで、会場がなかなか決まらなかつたり、その場でもみんなでワイワイというよりは会話の中身の質が年記者と若手で温度差を感じる。そこで、職員からお金を毎月少しずつ(1000円とか)徴収しその積み立て金で県内外の色々な幼稚園へ視察・勉強・研修にみんなで行き、夜は懇親会で、次の日はその県の風土を親しんで帰ってくる(観光地やお土産)という『研修旅行』はどうか？</p>

観点	評価 A: 自信をもって B: 概ね良好 C: 改善の余地有 D: 課題である E: 全然出来ていない	教職員						
		園長	A	B	C	D	E	無
新時代に対応できる多様な協働的スタッフ体制の構築への努力	園は、子ども園としてのスタッフ同士の連携、協力がしやすい、働きやすい職場環境作りに努めると共に、これからの時代の多様で協働的なスタッフ体制の整備に努めている	C	1	8	5			

全体を通観しての自由記述による園評価

キラキラ会について、以前保護者として参加していた頃と比べよりオープンに、気軽に相談できる雰囲気に変ってきているように感じる。一方で、プライベートを重視する保護者の方は会と距離ができてしまうこともあるのではないと思、個別の配慮の必要性も重要だと思った。インクルーシブに関する園内研修に参加して、ここまで一人ひとりのことを全職員で共有し細かく考え、話し合い、それぞれに対応したためをもち日々の取り組みを考えているということを知り、驚くとともにキラキラ子をもつ保護者として感動した。また、木の花脈インクループが木の花の保育の基礎ともいえるのもとてもよわかり、キラキラ会がよりオープンになってきていることで保護者間でも「木の花の保育」への理解が深まることもによりひろく伝わっていくといいなと思う。

・今年気になる子どもたちにスポットを当ててエピソードを収集しようという動きは大事だな～と感じる一方、整理すると逆に配慮がいらないう子っているの？と負担に感じるところもある。目立つ子は目立つし、目立たない子は目立たないを思い知らされるエピソードの集まり具合の多寡もどうしたらいいものなのだろうか、とも改めて実感。ワンデイ(その子を集中して見守る)作業をしていけばひとちお便りとして保護者にエピソードを伝えやすー石二鳥になるかもしれない。

・今年ぐみ継続のベテランの先生がいなかった分、去年の動きに縛られない生活、発信をOKのつとに感心していた。自分はどうしてもわからない事・自信のないことは去年に準じたり、去年を知る先生に頼ってしまつたりしているので。ただやはり遠慮してこもってしまう、ぐみだけで完結してしまう事も前半は多かったのも最近のようにガッツリ本園に遊びに来る日をもっと増やしてもよかつたかな～と感じる。(お互いダメじゃない時も例えば遠慮せずズスズカと遊びに来てOKの雰囲気から以上児スタッフから出していいことも必要であらう。)

・またキャハとの問題もまだまだ解消しきれていないところも多いが、このコロナをきっかけとした行事の見直し(お客様の制限)はだいぶ整理されてきたのかなと感じる。(ここは観てほしい、ここはお掘り分け程度でもいいなど)ただ、行事をそぎ落とした結果、他学年の親が入り乱れて同じものを観る機会は減ってしまったが、土曜版創立記念日、年少親子レク、他学年の親発表会OKなどは異学年ない父母入り混じって同じ場を共有できる機会になったのではと感じる。上の学年も親子レクのような機会があってもよいかもれない。

・発信は写真メインの方が疲れたところに話をネタになりやすいな～と実感。子どもたちの言うことに耳を傾ける余裕さえない現代の親たちに子どもとの会話のきっかけとなる発信は今年大きな飛躍だつたように感じる。フリーの先生に感謝。(文章は大人は楽しい・嬉しい人もいるかもしれないが、子どもとは共有しにくい。写真がきっかけとなり一つあると「これって・・・」と会話が生まれて子どもも客観的にその日のことを思い出せるのではないかと感じた。)

・若手とベテランが頼むことが多くなり、やはり何が大事なのかを伝えきれていないのが増えたのではないかと感じることもある。昔に比べ業務が大変になったと感じることも多いが、これはしんどくても大切なこととして割り切れていたことを若い世代にどうつないでいくのか・・・、時間の捻出の仕方は人それぞれあると思うが、若い世代に負担をにも感じさせず、でもこれは大事だよな！という大切にしたいことを共有する時間を作り出し、懇親会や日々のフリータイムでも話せる雰囲気作りが必要だと感じている。

・気になる子どもたちに焦点をあててエピソード収集し、みんなで共有し合えたのは、とてもよかったと思う。人数が増えることで負担に思うかもしれないが、将来的に困るであろうことが予想される子どもたちであることを、保育者が意識し援助したり、記録し、いろんな視点から見守るべきだと思う。また、見逃しがちな目立たない子にも何かしら気づききっかけにもなればと思う。今は担任がメンバー選定をしているが、自由遊びの面から見て、フリーの先生からの気になる子ども(遊べていない...)も共有し合えてもいいのかなと思う。

・ぐみの子ども達の存在は、一人っ子の多いお庭の家族環境を思うと、小さい子を思いやってくわつたり、大きな自分を感じる中で自己発揮しようとする体験は貴重だと思う。小さい子が大きい子の姿に憧れ、遊びの文化が継承する様子に、年長児にとっても小学生と関わって遊ぶ機会があるといいなと思う(昔は近所でやってたような遊びの継承)。今年1年生対象の「our ship」の企画があったが、預かり時の1年生以外の参加も可能な遊び場の開放ができないか。土曜保育の園開放で、積極的に小学生の受け入れもいいかと思うが。学校に行っても「遊び」を感じられる場も時間もなしと思うので。

・コロナの規制が緩和し、ようやく保護者とのコミュニケーションを自然とこれるようになった。今の年長児の保護者は年少時代からマスク生活で、顔すらよくわからない状態だったので。園に出入りし、行事に参加しながら、幼稚園生活を肌で感じたり、サークルなどで保護者と保育者が対等に関われる仕掛けがあることはよかったと思う。

・園として働き方改革に向け、みんなで話し合いながら試行錯誤してくれていることに感謝している。しかし土曜保育や預かりなど負担感が一向に減つた気がしないのが正直なところ(その分、支給されているのはありがたい)。特に若い人には「子育てがあつたり、これから家庭を築く」、より働きやすい環境が必要だと思うので、課題が大きいと思う。年長担任の負担も大きいと感じ、打ち合わせや準備の時間の確保の仕方など、何か手立てがないものか？先輩の経験者として出来る方法や手立てを若手に提示できるよう意識を絞ってきたい。

・研修の中で、大井先生が「この(以上児の)保育があってそのことがぐみに十分活かされてない」と鋭く指摘されたことが頭に中に残っている。実際に何をどうしていったらいいの・・・？と思ってしまう日々の中で、ぐみも幼稚園の方にとどんどん遊びに来る機会を作れば、おのずと、以上児の姿が飛び込んでくるのではないかと思う。(安全を考えうえで)ぐみの子たちは、なかなか冒険的な体験をしているし、その中で体得していることも多いことを実感した一年であつた。

・若い先生と組むことで、若い刺激をもらえる(笑)。他の園で働いていた先生からは、未満児の発達的事を開けたり、自分が分からないことや、疑問に思うことなどをいろいろと話が聞けるのでよかった。と思う。ICT関係は、若い先生に任せられていることが殆どで、いつも快くやってもらっている。作業が速いので、「ドキュメンテーション」などを作るのも(写真の取り込み、編集など)きつやり、「ドキュメンテーション」を時々発信することで、保護者の方にも、日々の様子を分かりやすく伝えることができている。木の花経験者として伝えられることやICTの代わりに保育を担うなど、外の経験を持ち込み得意なことを発揮できる若手と経験者との組み合わせでより働きやすい環境に近づいているようにも感じる。

・ぐみ棟で生活する未満児から年長児までが「全園児」だという意識がもしかしたらまだ低いのかなと思う。運動会の競技や縦割りグループを考える時に以上児だけの集団で考えてしまう癖があるのかもかもしれない。全園児が自然と交わるような遊びの仕掛けや活動を意識していく必要があると思う。

・コロナによる様々な制約が緩和されたことで、以前のように保護者が気軽に園に出入りして立ち話したり階段に座って子どもの姿をばっっと見ているのを見ると、「この光景、懐かしい…」と感じた。スタッフも子ども達の体調の変化に以前ほどビビリしなくなつたので、そういった大人の変な緊張感がなくなつたことは子どもにも伝わっているように感じた。

・避難訓練のあり方について。今までは、子ども達には不意打ち的な[子によっては、怖がらせるだけの]訓練方法だったが、子ども達も元旦に大きな地震を経験した事や、近年、園児の中にもハイセンシティブの子も多くなってきているので、より、子ども達への心のケアも考えて行かなければならないのではと思う。来年度は避難訓練の年間計画の日にち、内容も、保護者にも公表し、子ども達にも訓練内容を事前伝え、[場合によっては、不参加も有り]、訓練当日は、心の準備を持って、考えて(想定して)行動する訓練となるようにならないだろうか。

・園内研修の報告や、回覧なども、lineの中のノート機能を利用したり、記録をデジタル化し、家に帰ってからスマホでアクセスできる方法などにしてはどうか。夏に参加した研修でも、「どんなICTを導入し個々の事務負担の軽減や、職員間の情報共有事の時間削減に役立てましょう」との話があり、皆が使い慣れているLINEなどを活用したり、ICTサポーターなどに使えるアプリを紹介してもらい、少しでも業務の削減、時間短縮に使えたらと思う。こういうところに疎いところが木の花の課題ともいえるが、出来ないスタッフに強制するのはではなく、できる(やりたい)先生からどんどん取り組んでいったらいいと思う。

・今年、印刷機の故障でおたよりをオクレンジャーで配信したが最近のおたよりは写真を使うことが多くなり、印刷をしても黒くなり残念に感じることも多かった。しかし、配信だとカラーで保護者に見てもらえるので見やすかつたと思う。紙の削減につながるので定期的に、完全にクラウドばかりオクレンジャーでの配信をもつとも良い感じた。希望者には紙で読ましたら良しと思う。

・担任となることで行事の大変さを経験しましたが、同時に職員の温かさを感じる事ができました。いつも相談に乗ってくれ、苦手な部分は助けてくれたりと大変ではありますが、自分一人ではないなと実感でき、改めて木の花の職員との関係の良さを感じました。

・一口おたよりについて、保護者にはとても喜ばれている。中には全部保存しており、子どもが大きくなってからまた見返すと嬉しい言葉を送っていた。しかし、行事前の一口だよりは勤務中の時間の確保が難しく帰宅後、あるいは週末に書くこともある。行事前は帰宅が遅くなる事も多く週末に体を休めたいが、おたよりを書かないといけな。・・・となかなか体を休められない事もあつた。こども園に限り、働く保護者も増え、なかなか直接話せない保護者も増えているので一口おたよりは子どもの園の姿を伝えるのに大切な手段になっている。保護者にも喜ばれているのも知りつつも、行事前などは負担感も拭えない。なので、毎月必ず月未発行ではなく、時には大きな行事後に書くなど切羽詰まらずに書けるようなやり方も検討してはどうか、と思う。

・今年度は集まった配膳サポートでは、最初は人数把握が難しかったり、本当はおかわりしたい子が出来ず残食が増えたり、やってくれるお母さん方も大変だつたと思うが、回数を重ねるうちにこども用パッド、先生用パッド、おかわり用パッドで分け、あと何人食べないか、おかわりしてもいいのかなど把握の仕方もち少しずつ改善していけたと思う。またどうしたらいいのか一層に考え案を出してくれる保護者の方もあり、支えてくれたり協力してくれる保護者の方の優しさも感じられた。一日先生も給食費をもらっているので、来年度給食費が上がるので配膳サポートをしてくれるお母さんたちも給食費を頂いてもいいのかなとも思った。

・今年度、他園へ見学に行かせてもらったのがありがたかった。ほかの園ではどんな風に給食作りをしているのかや、どんな風に子どもと関わっているか、事務仕事のことなど教えてもらうことができた。ほかの園との横のつながりが全然なかったので、ほかの園の給食先生と関わりが持てたことがとても嬉しかった。話を聞くだけでなく給食室で実際に一緒に働かせてもらえたので、よりどんな風に運営しているのかも感じやすかった。

・子どもが順番にインフルにかかり、預け先がなかった時に看護休暇をとることができたり、アシスタントスタッフが自分の代わりに出てくれたりするなど快く休みをとらせてくれたこともありがたかった。

新しいスタッフが増え、今までとは違う他の園の保育から見た「木の花」をよく聞くことができるようになった。木の花の中で議論していくのもよかったが、他の園との違いを行事からふとしたことでもすぐ聞くことができるのがよかった。

園全体の課題を職員全体で細やかな視点と項目で見直し、考え、建設的に意見を出して振り返りの場を持つことを園として必要と思っていることが良いと思う。

今年度より就職し、毎日の生活がとても新鮮だった。来年に活かせる反省を振り返ったときに、ぐみと以上児との交流、本園・ぐみ棟の交流をもう少し早くからできたかもしれない、ということも全体で共有されたことも大きい。今年度は同じぐみ棟のスタッフたちに支えられている感があった1年だったが、年間の流れをつかむことができたので、来年度はもう少し主体的に動いたり考えたりしていきたい。何より子どもを真ん中に置いた保育の環境にいられることがありがたい。

・園スタッフが皆仲のいい、思っていることを言い合える、一部ではなく皆で一つのことについて考えることができる関係を築いていることが本当に素晴らしいことだと感じている。そのことが保育に繋がっていて、子どもに対していい意味で素直？(素直というワードチョイスが少し違うような気がするが)な気がする。だからこそ、子どもも大人に対して、思ったことが言えるし、してみたいことがあれば安心して挑戦することができているのではと思う。

・コロナが5類に引き下がってから、従来の木の花っぽさが戻ってきたように思う。また、完全に昔のように「ではなく、コロナ禍の時の良さを残しつつ、コロナ前の良さを戻すことで、暗黙の了解になっていたようなことをもう一度考えるきっかけになったように思う(「創立記念日は子ども達だけでお祝い」「クリスマス会の配信」「夕涼み会・バザー」の人が大勢いることでの賑わいの良さ」「祖父母の会の対面での触れ合いの良さ」など)。

・『若手の保育の継承と業務負担への対応、働き方改革』は来年度以降幼保連携型に移行することでさらに課題の中心にありそうな気がして氣を揉んでいる。ベテラン組も「やることが多い。時間が無い」と言っているが、冷静に振り返ると、「創立記念日はミニ発表会のような形態から子どもたちの誕生会へ」「父レクやビデオトークなどは年に2回ずつあったのが1回は異学年混合に」「運動会やバザー・発表会の書き込みが活動報告のお便りに」「早番・遅番もサポーターさんによって回数が減った」「クッキングしたときなどは、洗いや後片付けを給食スタッフがしてくれている」などと、子ども園時代の当初に比べて業務は軽くなっているはずなのだが、その分何かが増えている業務があるのだろうか？全てを時間内でやろうとするから「時間が無い」になってきているのだと思う。1日24時間は永久に変わらないのだから、職員の業務負担を減らすために、変えるのならば革新的に行事のやり方を考える(「家族の日」「七夕」「クリスマス」「節分」「お雛様」の製作を無くす、「創立記念日のミニ出し物を無くしてお祝いの歌だけ歌う」「バザー」をなくすなど)、ということも、あるいはこそっと何かを無くすというのも一つの案なのかもしれない。(「家族の日」「七夕」「クリスマス」「節分」「お雛様」の製作を無くす。・「創立記念日の子どものお祝いの出し物を無くしてみんなでお祝いの歌だけ歌う」・「バザー」をなくす。(創造は普段からトンカチとか触っているから『食』だけに特化するとか)・「父レクやビデオトークといった土曜日企画をなくす」などは・・・まあ、突拍子もない意見かもしれないが、業務の負担を軽減することと保育の中身とのバランスをどう取るのか？をもっと吟味して、何なら削れるのか？をみんなで納得して共有して取り組んでいきたい。

・『若手育成』・・・とても大事な反面、気がかりなのは幼保連携型となり、若手スタッフが子どもの『生活面(排泄・食事・着替え・身の回り)』『安全面(怪我・病気など)』の側面だけに力が注がれ、「子どもの面白さ」を見出す木の花らしい保育が見失われること。個々の性格もありそうした面におけるウエイトなども考えや感じ方で変わってくるかと思うが、『生活面』『安全面』だけが優先され、遊びの中に含まれる『汚れ』『乱雑』『危険さ』などが遠ざけられると子ども達にとってはプラスに出ていかなくなる、と心配である。木の花の保育の面白さ・良さは、子ども達がしていることや子ども達と一緒にすることを、大人(保育者も保護者も)が楽しんでいるかどうかだと思うので、若手育成のポイントは、ベテラン組のそうした姿などをどどん見せると同時に、若手の方が子どもと保育を楽しむ姿や『自分が楽しい！』という姿が目に見えて伝わって来た時に、それをベテラン組が積極的に声を出して、その良さを伝えていくのも大事ではなからうか。未満児担任になっても以上児担任になっても不満や愚痴をベテランに気軽に伝えられる雰囲気を作りつつ、一緒に組んだ時にどういう化学反応を起こすのか？も見守っていきたい。中堅組は、会議・研修等での意見の中身もそうだが、普段の保育・子どもへの関わり方も見ていて頼りになる存在になりつつある。若手にもいい影響が出ているのではなからうか。さらに打ち合わせや会議等でも若手の発言や意見を最後まで余計な口を出さずに聞いてから、自分の想いを伝える、若手に訊いたことを中堅やベテランが代わりにすぐ応えないなど、若手の発言機会を待つことも大事な若手育成のきっかけになる、と思う。自戒の意味を込めて、私たちベテラン組もそうありたい、と思う。

ようやくこども園として、スタッフが慣れてきたところに、次年度から幼保連携型に移行することで、負担が大きくなるのでは・・・と不安に思っているスタッフも多いと思う。その都度、不安や疑問を出し合い、子どもにとって、スタッフにとって、保護者にとって、を考えながらそのときにできることを協力してやっていきたいと思う。